

宇野和幸はステップスギャラリーが開廊して四ヵ月後から今日まで「うのゼミ展」を幾度と開催し、グループ展にも参加しているが、ステップスでの個展は初めてではないだろうか。職場は京都だが、宇野は京橋奥野ビルの 巷房での個展、千葉の睦ギャラリーや鎌倉寺院での「観 光展」などでのグループ展示を精力的に重ねている。

それでも今回の展示は、ずば抜けて冴えていた。近年の宇野の作品の題名は「Landscape of accumulation」であり、私は今回の展示会のリーフレットに寄せた批評の中で、宇野の蓄積する風景の動向を探ったが、やはり新作を目

の当たりにすると、自らの考察の足りなさを感じるしかなかった。今回の宇野の作品は、作品自体にも磁場が存在する上に、知り尽くしたステップスギャラリーの空間を非常に有効に用いた展示となった。

それによって宇野の作品が生きるどころか、ギャラリーの空間性も強調され、画廊とは無限の力を備えていることを立証した展示会となった。つまり、現代美術とは作品を「飾る」のではなく空間と「共に」ある、そこには人間が色濃く漂っていることを立証したのだ。



宇野の作品を展示する高さが僅かに異なることによって、全く新しい視覚が拓けていく。そして横長の作品は重力を与えられて垂直に、縦長の作品は重力から解放されて水平に果てしなく広がっていく。したがって幾層にも描かれている線は作品の奥行が与えられ、見る者は自己の視点が前後し、何時しか上下左右を行き来する、自由な存在としての価値を獲得するのである。

宇野の作品が持つ上品さもあるのだが、今回の展示が余りにも綺麗にまとまりすぎた感は否めないであろう。しかし、

美しさが実現されたからこそ、次の段階へ移行できるのである。現代美術は人間が持つ美醜を否定せず、同時に受け止め、晒す必要がある。よくよく考え直すと、宇野の作品が持つ、作品のシェイプが携える垂直と水平の断片と断絶は、生き物が全て有限の命であることを無常に突きつけてくるのである。その中で実現される世界は、決して甘くない。

我々は自らが消滅しても、その存在が連続しなくとも、いつか、どこかで繋がっている。人と人との関係性が途切れることなど決してないのだ。そのような宇野の見る風景に、私達は、希望を捨て去るのではないことを想い起こすべきだ。

